

文部省推賞

世界に誇る日本の代

表的藝術は文樂座の

人形芝居

我々同胞は

是非一度は

文樂を見よ



日本の  
国寶的

# 文樂人形淨瑠璃芝居

演公得見目お

竹松阪大  
**座樂文**

御 挨拶

今度愈々皇軍慰問並に在滿同胞慰問の爲、國粹の精華文樂座人形淨瑠璃芝居が紋下竹本津太夫以下最も人氣ある連中一行五十余名を以て初の御目見得をする事になりました。

當代の名寶太夫では竹本津太夫、三味線では鶴澤綱造、人形では吉田文五郎、皇國のため第一線に立たれる皆様方には是非極つけの藝術を見て戴き度いと老軀をものごもせず渡滿致しました。出來得るならば今後毎年定期的に渡滿し皆様方の御期待に副し度いと存じます此の世界的に有名なる文樂座人形淨瑠璃芝居に絶大の御賛助を以て御聲援あらん事を御願ひ申し上げます。

大阪・松竹

文 樂 座





假名手本忠臣藏

道行旅路の嫁入

道行旅路の嫁入

- 竹本小春太夫
- 竹本源路太夫
- 豊竹辰太夫
- 竹本播路太夫
- 竹本津の子太夫
- 鶴澤芳之助
- 鶴澤友衛門
- 竹澤團二郎
- 鶴澤綱治
- 鶴澤友三郎

人形

- 妻 戸無瀬 吉田扇太郎
- 小 浪 吉田光之助

道行旅路の嫁入は全段の八ツ目に、山科閑居は九ツ目になつてゐます。この初演は寛延元年八月の竹本座であります。旅路の嫁入は大星力彌と許嫁の仲にある加古川本藏の娘小浪は母の戸無瀬に連れられて山科にある大石の閑居を訪れるのです。その途すがらのいと面白きいと華やかな錦繪美たつぷりな條りです。

(床本) 道行旅路の嫁入

浮世とは誰いひそめてあすか川扶持も知行も瀬とかはりよるべも浪の下人に結ぶ鹽谷のあやまりは戀のかせ

杭加古川のむすめ小浪が言號結納もとらず其儘にふり捨てられし物思ひ母のおもひは山科の簀の力彌をちからにて住家へおして嫁入も世にありなしの義理遠慮こしもとつれず乗物もやめて親子のふたりづれ、都の空に心ざす雪のはだへもさむそらは寒紅梅の色そえて手さき覺へずこゝへ坂さつたとうげにさしかより見かへれば富士のけぶりの空に消行衛もしれぬ思ひをばはらす嫁入の門火ぞと祝ふて三保の松ばらにつとくなみ松街道をせましとうつたる行列はたれとしらねどوراやましア、世が世ならあのごとく一度のはれと花かざり、だてを駿河の府中過城下すぐれば氣さんじに母のこゝろもいそくと二世のさかづきすんで後閨のむつごと

さゝめごと親ならず子しらずとつた  
のほそ道もつれあひ男松の肌はひつ  
たりとしめてからみし新枕、女夫が  
中の若緑り抱て寝松の千代かけて替  
るまいぞの睡言は嬉しからふとほの  
めかす、アノ母さまのさし合な脇へ  
こかくしてまり子川宇都の山べのう  
つゝにも夢にも早ふ大井川、水のな  
がれと人ごゝる都の花にくらぶれば  
日影の紅葉色づいてつい秋がきて小  
男鹿の夫ゆへならば朝夕にしん苦す  
るのも何の其此手拍のうら若き二人  
が中にも産んでねん／＼ころゝん  
やねん／＼が守はどこへいたどこと  
は知た其人に逢ふて恨を何とマアど  
ふ言てよからふとしんき嶋田のうさ  
はらし我身のうへをかくとだに人し  
らすかの橋こへて行ば吉田や赤坂の

まねく女のことゑそろへ縁をむすばゞ  
清水寺へまいらんせ音羽の瀧にぞん  
ぶりぎ毎日そふいふて拜まんせそふ  
じやいな、しゝきがんかうがゝいれ  
いにうきう神樂太鼓にヨイコノゑい  
こちの晝寝をさまされた都殿御にあ  
ふてつらさがゝたりたやそふとも  
くもしも女夫とかゝりゝならば伊  
勢様の引合せ鄙びたうたも身にとつ  
てよい吉左右に鳴見がた熱田のやし  
ろあれかとよ七里のわたし帆をあげ  
て鱸びやうしそろへてヤツシツシ楫  
とる音はすゞむしかイヤきり／＼す  
鳴や霜夜とよみたるは小夜ふけてこ  
そくれまでと、かぎりあるふねいそ  
がんと母がはしれば娘もはしり空の  
あられに笠覆ひ船路のともの後や先  
しやう野龜山せきとむるいせとあづ

まの別れ道驛路のすゞる鈴鹿こへあ  
ひの土山雨がふる。ふり見ふらずみ  
定めなき旅はいろ／＼うきが中あな  
たの松蔭花やかに壺笠立笠大鳥毛行  
列揃へぼつ立る武門の曠をあり／＼  
とうつすや田子の浦人が聲面白く手  
をたゝき富士の白雪朝日でとける娘  
嶋田は寝てとく帯のしんから底から  
戀にや夜も日も明ぬ物じやとなサア  
サかはいさが増わいな梅の苔と戀仕  
の文はひらく間を待兼山の眞實せい  
文色にや憂身をつくす物じやとなサ  
アサ可愛さが増わいなうかれて歸る  
里わらは、みなくちの葉にいひはや  
す、いしべ石塙で大いしや小石拾ふ  
て我夫となで川さすりつ手にすへて  
やがて大津や三井寺のふもとを越て  
山科へほどなきさとへいそぎゆく。



酒屋の段

艶容女舞衣

酒屋の段

(床本) 酒屋の段(切)

豊竹つばめ太夫  
豊澤猿糸

人形

嫁	お園	吉田文五郎
親	宗岸	桐竹門造
半兵衛女房	吉田玉徳	
舅半兵衛	桐竹紋太郎	
茜屋半七	吉田榮三郎	
美濃屋三勝	桐竹紋司	

こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛を獨寝の、お園を連れて爺親が、世間構はぬ十徳に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯をともし、表を縮と急々と、出合頭に。詞ホ、是はく宗岸様、其處に居るはお園じやないか、アノ母様、お替りもござりませぬかと、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼る。宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿お宿にかと、娘を連れて打通れば、妻は門の戸引立て、サア〜先づお上

り成されませと、奥底も無き詞の中夫と聞くより半兵衛が、一間を出る濫々顔。詞娘を連れて行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいませ、此間は嫁女の歸つて居られまして、いかいお世話でござりませせん、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と、無理に引立行つたのは、娘に引を取らずまい爲儂が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫁はれふが如何爲ふが、男の方から追出すまで、取戻すと云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が

一生の仕損ひ、と悔んでも跡の祭り  
闕めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸ま  
ねば、若や病が起らふかと、見て居  
る親の心は闇、儻も天満に年古ふ住  
んでゐれば、人に理屈も云ふ者なれ  
ど、誤りは詫ねば成らぬと、年寄の  
顔押拭ふて來ました。何彼のことは  
了簡して、今までの通り嫁じやと思  
ふて下され、これ頼みます御夫婦と  
謝り入つたる挨拶に、お闕もうぢう  
ぢ、手を支へ、爺様の一徹で、無理  
に連れられ歸りしが、一旦殿御と極ま  
つた半七様に嫁はれるは皆私が不調  
法、鈍に生れた此身の科、詞今から  
随分お氣に入る様に致しませう程に  
猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さり  
ませ、お二人様と、跡は詞も涙なり  
詞オ、何のマア、其方さへ其心なら

此方は變らぬ嫁姑、ノウ親仁殿、そ  
うぢや無いか。イヤそらうぢやない。  
昔唐に例が有る。太公望とやらいふ  
人の妻、夫に隙取り月日を経て、訛  
言に來りし時、鉢の水を大地に覆き  
せ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦  
に成らんと。太公望が云はれたと、  
且外講釋で聞いて來た、夫と丁度同  
じ事、此方の方から無理隙取つて、  
今更嫁と思へとは、何時まで云つて  
も返らぬ事、口詞叩かずと、早う連  
て退しやれくと、膠もしやくとり  
も納戸口、顔も背けてゐたりける。  
詞オ其腹立は尤もく、重々不調  
法は、此天窓に免じ了簡して、何卒  
嫁に、否でござる、忤めも勘當した  
れば、嫁と云ふべき者もない筈。サ  
ア夫も懲しめの爲當座の勘當。イヤ

當座でない、七生までの勘當ぢや。  
ム、其又七生まで勘當した半七が代  
りに、此方は何で繩に掛つた。ヤア  
サア半七とは親でも子でも無い此方  
が、今日代官所で何の爲に、縛られ  
て戻らしやつたと、思ひも奇らぬ宗  
岸が、詞に悔り驚く、女房、嫁も俱  
々立寄つて、肌押脱せば半兵衛が、  
小手を緩めし羽搔締。ノウ情無や何  
事と、嫁はうろく、女房も取付き  
歎けば宗岸が。詞イヤ未だ驚くこと  
がある、聲の半七は人殺し、お尋ね  
者になつたわいのと、聞くより二人  
は又悔り、夫は何故如何した譯、様  
子を聞かしてコレく半兵衛殿と問  
へども更に返答は差俯いて詞なし。  
宗岸涙の目をしばたゝき、詞一昨日  
の晩山の口で、善右衛門を殺したは

茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいか怖りせまいか、膝も腰も抜果しが、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儂も娘を取戻したら、親にかゝる首繩も無い、能い事爲たと世間から譽める人も有らうが、親と成り舅と成るが、大抵深い縁かいのう。斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れてきた心はのゝ一旦

嫁に遣したれば、半七が厭がるならハテ尼にしてなと此内で、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下され、コレ手を合して頼みます、訖言が叶はねば、引放されたと突き詰て、短慮な心も出し居るか、案じて、過して夜の目も合ず、母親は無し唯一人、彼女を思ふ儂が因果、此方の繩目も半七が、科人に成つたら猶可愛かる、譬へ又勘當が定でも又離切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切れぬ血筋の親、儂も此方は程は無けれども娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はふが儂や可愛い不便でござる。これこれ聞入れて給へ半兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き、我強う

生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣りオ、道理じや〜宗岸殿。と、跡はないぢやくり、妻もお聞も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり。半兵衛漸々顔を上げ、云はねばならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にと三人は惜々奥へ泣に行く心の中ぞ哀れなる。跡には園が憂思ひ、かゝれとてしも鳥羽玉の、世の味氣無き身一つに、結ばれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言、詞今頃は半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返らぬ事ながら、私と言ふ者無いならば半兵衛さんもお通に免じ、子まで成

したる三勝殿を、疾にも呼入れさし  
やんしたら、半七様の身持も直り、  
御勘當も有るまいに、思へば、此  
園が、去年の秋の煩ひに、寧そ死ん  
で終ふたら、斯うした難儀は出来ま  
いもの、お氣に入らぬと知りながら  
未練な私が輪廻故、添臥は適はずと  
も、お側に居度いと辛抱して是まで  
居たのがお身の仇、今の思ひに比ぶ  
れば、一年前に此園が、死る心が付  
かなんだ。堪へて給へ半七様、私や  
此様に思ふてゐると、恨みつらみは  
露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増  
る憂思ひ。斯る哀れも知らぬ子の、  
合泣く聲に目や覺ましけん、一間を  
出て、乳飲まう、乳が飲み度いおば  
顔見て悔り抱き寄せ、詞ヤア其方は

美濃屋のお通じや無いか、爰へは如  
何して在つたと、不審ながらも抱上  
ぐれば、半七術宗岸母親も一間の内  
を轉び出、詞オ、これ、嫁女、忝  
ない其心、障子の内で聞く度に、拜  
んでばかりゐたはいの。禮云ふ事も  
澤山あれど心の急くは此子の事、美  
濃屋のお通と云はしやつたは、半七  
と三勝の。アイお二人の中に出来た  
お通と云ふは此子じやわいな。ヤア  
親父殿聞かしやつたかオ、聞いて  
居る、其又お通を、ナ、何で  
捨子にして卜此地へ越した是や理由  
が有らう、娘懐か何所ぞに、書い  
た物でも無いか、早う尋ねて見やと  
言ふ内に、わくせきあくる守袋、  
内よりはらりと落ちたる一通取る間遅  
しと封押し切、詞ヤア何ぢや、書置

の事と書いて有る。ヤア、これ  
嫁女其方の好い目でちやつと讀  
や。アイ、ナニナニ十度契  
りて親子と成る、父の恩は山よりも  
高きとの世の教、我身にも辨へ居候  
へども、其御恩も得送らず、儘なら  
ぬ義理に搦まれて、心にも有らぬ不  
孝の罪お赦し下され度候、別て母様  
の御養育。申しお前の事でござりま  
す、能ふお聞き成されませいオ、能  
ふ聞いてゐますわいの。唄、聞いて  
てゐるさの障子より、洩れ出る月は  
呀れど胸の闇、無残や半七は、今宵  
限りの命ぞと、三勝伴ひ、しほし  
ほと心に掛る我子の顔、名残にせめ  
て今一目と、俱に戸口に夜の鶴、詞  
何日まで泣いても返らぬ繰言親父様  
の御繩目、早う解くは身の最後、イ

ザ／＼急がんサアおぢやと立上りし  
が、今生の別れにせめてお顔をと差  
し覗けば、三勝も、お通を一目と延  
上り、見れども親子隔ての關何と千  
萬無量の想ひ、兩手を合せ伏拜み、  
合おさらば合／＼と云ふ聲も歎きに  
埋む我家の中、見返り／＼死に行く  
其三勝が言の葉を、爰に移して止め  
けれ。



壽式三番叟

千歳

翁

三番叟

三番叟

豊竹呂太夫

竹本文字太夫

竹本源路太夫

豊竹辰太夫  
竹本播路太夫

鶴澤重造

鶴澤友衛門

竹澤團二郎

鶴澤友三郎

鶴澤綱治

壽式三番叟

能曲の神聖な祝儀物に翁、千歳、三番叟の舞があり、翁を天照大神に千歳を八幡大神に三番叟を春日明神に擬し翁の面を樂屋に安置して神酒を供へ舞臺へ立つものは精進潔齋して演じたと傳へられてゐます翁、千歳

三番叟の起源に就ては一説には東歐ペルシヤ邊の祈念の舞踊が支那を経由して渡來したもので「たうたうた

らり」といふ言葉は西藏語の神といふやうな意味であるといふし、又この曲が他の摺り足の舞式でなく、はね踊るダンス式であるといふことも

大いに此説を傾聽せしめる資料であります。

(床本) 壽式三番叟

夫豊秋津洲の日本國。常立の尊より天津神七世の後。地神の始天照大神若月に籠らせ給ひし時。世は常闇と成りけらし。其時に四方津神。八百萬の御神達、神集に集め給ひ燎火をたいて庭神樂神すゞしめと木綿襪太祝詞の。神歌や式三番の其謂お

さく申も恐あり。とうくたらりく。たらりあがりらよりとう。ちりやたらりく。たらりあがりらりとう。鳴るは瀧の水日は照共

人形

翁 吉田 玉 幸

千 歳 吉田 文 作

三 番 叟 桐竹 紋 十 郎

三 番 叟 吉田 扇 太 郎

たへずとうたりありうどうくくく  
 どうくくと鳴る鼓。宇佐の神の御役  
 にて。笛の初音も高窓や。笛吹の大  
 明神。大鼓は高野の大明神。太鼓は  
 熱田の源太夫。いづれも秘曲の打囃  
 子鳴は瀧の水。日は照神の神勇めさ  
 れば春日の大明神。翁の秋ひるがへ  
 す。扇の手こそ面白や。青にぎて青  
 丹よし、奈良の都の三笠山。かげ  
 もあらたに慈悲萬行七五三の歩みの  
 大事十五の拍子、とりんぐに萬代の  
 池の龜は甲に。三曲を戴いたり瀧の  
 水麗々と落ちて、夜の月あざやかに  
 うかんだり。渚の砂さくくとして  
 且の日の色をらうず。天下泰平、國

土安穩の今日の御祈禱なり。千秋萬  
 歳悦びの舞なれば一舞まはふ萬歳樂  
 萬歳樂。くくく。長久圓満息才延  
 命。今日の御祈禱なり。おさへく  
 おふ悦びありや、我此所よりも、外  
 へは行かじとぞ思ふ物の音につれて  
 立舞ふ小忌衣、千歳は近江なる、白  
 髪の御神なり、黒き尉は住吉の大  
 神。鼓は浪のとふど打音は高間が原なれ  
 や岩月に向ふ神かぐら、ふそるぐせ  
 りと吹笛も、ひりやひしぎの音色迄  
 春は霞の立姿、サンベン、物に心得  
 たる後の太夫殿にげんぎう申そう、  
 アトてうど參つて候、サンベン、誰  
 お立候ぞ、アト年頃の朋輩友達御後

の爲に罷出で候、今日の三番叟猿樂  
きりく尋常に舞ておりそへ、色の  
黒い尉殿、サンパン、此色の黒き尉  
が今日の御祈禱を千秋萬歳所繁昌と  
舞納めふする事は何より以て安ふぞ  
う。先後の太夫殿は元の座敷へおも  
くと御直り候へ。アト某が元の座  
敷へ直ろうずる事は尉殿の舞よりも  
いと安ふぞう、御舞なふては直り候  
まじ御舞候へ、サンパン、御直り候  
へ御舞候へ、サンパン、あゝゆるば  
たしやアトさらば鈴を參らせふ、サ  
ンパン、そなたこそ、鐘初日は諸願  
満足圓満二日は又二ツ柱鉦女の  
神子が一、二、三、四、五、六、七

八九度か百千萬の舞の袖五月のさ女  
房が笠の緒を列ねて早苗おつとり打  
上げて諷ふた千町萬町鐘萬町三人  
田をばぞんぶりぞくそんぶりく  
くぞ御田を植るならば笠かふて着  
せふぞ、笠買ふてたもるならば猶も  
田を植ふよ、三日は福德壽福圓満子  
徳人の子寶車座にならべた。たつま  
ついるまつかいつくひつ付火うち袋  
にふりと付て候ぞ、是式三の故實  
にて、三日、是を舞とかや柳は縁花  
は紅、数々や濱の眞砂は盡る共、盡  
せぬ和歌ぞ數鳥の神の教の國津民治  
まる家こそ目出たけれ。



松王首實驗の段

中 竹本津の子太夫  
切 鶴澤綱治  
鶴澤綱造

人形

武部源藏 吉田扇太郎  
女房戸浪 吉田光之助  
菅秀才 桐竹紋昇  
一子小太郎 吉田文枝  
春藤玄番 吉田玉市  
松房丸 吉田玉幸  
女房千代 吉田文五郎  
よだれくり 吉田文二郎  
御臺所 吉田文之助  
手習子 大田文之助  
組子 大田文之助

菅原傳授手習鑑

(床本) 松王首實驗の段 (切)

引連れ急ぎ行く。どりやちの子と近付きにと、若君の傍に寄せ、機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ、内入悪く子供を見廻し、詞エ、氏より育と云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立すと、思ひありげに見えければ、心ならず女房立寄り、詞いつにない顔色も悪し、振舞の酒機嫌かは知らぬが、山家育は知れてある子供、憎体口は聞えも悪し、殊に今日は約束の子が寺入して居ります、さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢

つてやつて下されと、小太郎連れて引合せど、差俯伏いて思案の体、いかいけに手をつかへ、詞お師匠様、今から頼み上げますと、云ふに思はずふりあをのき、きつと見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色やはらぎ詞扱て、器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扱てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も詞何とよい子よい弟子でござんしよが。よい共、上々吉、シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來と云ふて。オ、それもよし、大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまが出た、小太郎俱に奥へくと、

若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向  
ひ詞最前の顔色は常ならぬ血相、合  
點の行かぬと思ふた所に、今又あの  
子を見て打つてかへての機嫌顔、猶  
もつて合點ゆかず、どうやら様子が  
ありさうな、氣遣ひな聞かしてと聞  
へば源藏詞オ、ウ氣遣ひな筈、今日  
村の饗應と偽り、某を庄屋の方へ  
呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今  
一人は菅相巫の御恩をきながら、  
時平に従ふ松王丸、こいつ病者なが  
ら見分の役と見え、數百人にて追取  
巻、汝が方に菅相巫の一下子菅秀才  
我が子としてかくまふ由、訴人あつ  
て明白、急ぎ首打つて出すや否や、  
但し踏込み請取ふや、返答いかにと  
のつ引ならぬ手づめ、是非に及ばず  
首打つて渡さうと請合ふた心は、數

多ある寺子の内、いづれなりとも身  
がはりと、思ふて歸へる道すがら、  
あれか、これかと指折つても、玉簾  
の中の誕生と、菰垂のなかで育つた  
は似ても似付かず、所詮御蓮の未な  
るか、いたはしや淺ましやと、居所  
の歩みで歸りしが、天道のひかへつ  
よきにや詞あの寺入の子を見れば、  
萬更鳥を驚とも云はれぬ器量、一旦  
身がはりで欺き、此場さへ遁れたら  
ば、直に河内へお供する思案、今暫  
くが大事の場所と、語れば女房、待  
んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内  
の悪者、若君のはよう顔見知つて居  
るぞへ、サアそこが一かばちか、生  
顔と死顔は相好の變る物、面さし似  
たる小太郎が首よもや、鬢とは思ふ  
まじ、よし又それとあらはれたらば

松王めを眞二つ、残る奴輩切つて捨  
て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途  
の御供と、胸をすゑたが一つの難儀  
今にも小太郎が母親迎ひに來たらば  
なんとせん、此義に當惑、さし當つ  
たは此難儀詞イヤ其事は氣づかひあ  
るな、女同志の口先で、ちよぼくさ  
欺して見よ。イヤ其手ではゆくまい  
大事は小事より顯るゝ、ことによつ  
たら母親共、エ、イヤこりややい、  
若君には替へられぬ、お主の爲め辨  
へよと、云ふに胸すゑ、さうでござ  
んす、氣よはふては仕損せん、鬼に  
なつてと夫婦は突立ち、互に顔を見  
合せて詞弟子と云へば我子も同然  
サア今日に限つて寺入したは、あの  
子が業か、母御の因果か、報ひはこ  
ちが火の車、追付け廻つて來ませう

と、妻が歎けば夫も目をすり、せまじき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居たる、斯る所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門口にかき据れば、跡には大勢村の者つきしがふて申上げます 詞皆これにをる者の子供が、手習ひに參つて居ります、若取違へ首討たれば取返しかなりませぬ、どうぞお戻し下されと願へば玄蕃、ヤアかしましい蠅虫めら詞うぬらが伴の事迄、身共か知つた事か、勝手次第に連失うと、叱りつくれば松王丸、ヤレお待なされ暫くと駕より出るも刀を杖、詞憚りながら彼等迎も油断はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役務むるも、外に普秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目仕終すれば、病身の願、

御暇下さるべしと、難有き御意の趣き、疎かにはいたされず菅相、巫の所縁の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて銘々が伴に仕立て助けて歸へる手もある事、コリヤやい百姓めら、ざはくぬかさず共一人宛呼び出せ、面あらためて戻してくりよと、のつ引させぬ釘鏝、打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸轟かす計りなり。表はそれとも白髪の親仁、門口より聲高に、長松よくと呼出せば、オット答へて出てくるは腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪と墨、之れではないと許しやる 詞岩松は居ぬかと呼ぶ聲に祖父様、なんぢやとはしこくて出て来る子供のごわんげなき、顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ば

ぬ連うせうと、にらみ付けられ、おこわや 詞嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く、次は十五の湜くり、ほんよくと親仁が手招き 詞とよおれはモウ爰から抱れていのと、甘へる顔は馬顔で、聲きりくすオ、泣くな、抱いてやらうと干鯉を猫なで親がくはへ行く 詞私が伴は器量よし、お見違へ下さるなと、斷り云ふて呼び出すは、色白々と瓜實顔、こいつ胡亂と引とらへ、見れば首筋眞黒々々、墨かあざかはしらねども、こいつでないと突放す、其外山家、奥在所の子供残らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が産した計辛、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸浪も胴をす

ゑ、待つま程なく入來る兩人詞ヤア  
源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そ  
と請合ふた、普秀才が首サア請取ら  
う早く渡せと手詰の催促、ちつとも  
憶せず詞かり初ならぬ右大臣の若君  
かき首、ねじ首にもいたされず、暫  
くは御用捨と立上るを松王丸詞ヤア  
其手はくわぬ、暫しの用捨とひまど  
らせ通仕度しても、裏道へは數百人  
を付け置き、蟻の這出る所もない、  
生顔と死顔は相好がかはるなど、  
身代の賽首それもたべぬ、古手な事  
して後悔すなと云はれて、ぐつとせ  
き上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病ほ  
うけた汝が眼玉がでんぐり返り、逆  
様眼で見やうはしらず、紛れもなき  
普秀才の首追付け見せう。オ、その  
舌の根の乾かぬ内に早く討て、とく

切れと玄蕃が權柄、ハツと計りに源  
藏は胸をすゑてぞ入にける、傍に聞  
き居る女房は、爰ぞ大事と心も空、  
檢使は四方八方に、眼を配る中にも  
松王、机文庫の數を見廻し詞ヤア合  
點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等  
は以上八人、机の數が一脚多い、其  
伴はとこに居るぞと、見咎められて  
戸浪ははつと詞イヤこりやけふ初め  
て寺、イヤ寺参りした子がござんす  
何馬鹿な。オ、それく是が即ち、  
普秀才の、お机文庫と、生地を隠し  
た塗机、ざつとさばいて言ひ抜ける  
詞ヤア何にもせよ隙とらずが油斷の元と  
玄蕃諸共つツ立上る。こなたは手詰  
の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ  
音、はつと女房胸を抱き、ふん込む  
足も、けしとむ内、武部源藏白臺に

首桶乗せてしづく出で、目通りに  
さし置き、詞是非に及ばず普秀才の御  
首、討奉る、云はゞ、大切な御首  
性根をすゑてサア松王丸、しつかり  
と檢分せよと、忍びの鏝元くつろげ  
て、虚を云はゞ切付けん、實と云は  
ゞ助けんと堅唾を呑んでひかえ居る  
ハ、ハ、ハ、何んのこれしきに性根  
所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か  
金札か、地獄地極の境、家來衆。源  
藏夫婦を取巻きめされ、かしこまつ  
たと捕手の人數十手こつと立かかる  
女房戸浪も身をかため、夫はもとよ  
り一生懸命、サア實檢せよ檢分と云  
ふ一言も命かけ、うしろは捕手、向  
ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰  
ぞ絶対絶命と、思ふ内早や首桶引寄  
せふた、引きあけた首は小太郎、質

と云ふたら一討ちと、早抜きかける  
 戸浪は祈願、天道様、佛神様あはれ  
 み給へと女の念力、眼力光らす松王  
 が、ためつ、すがめつ窺ひ見て、詞ム  
 ウコリヤ菅秀才の首打つたは、まが  
 ひなし、相違なし、と云ふに恠り源  
 藏夫婦、あたりきよろ／＼見あはせ  
 り、檢使の玄蕃は見分の詞證據に、  
 出かした／＼よく打つた詞褒美には  
 かくまふた科ゆるしてくれる、イザ  
 松王丸片時も早く時平公へお目にか  
 けん、いかさま、隙どつてはお咎め  
 もいかゞ、拙者はこれよりおいとま  
 たまはり、病氣保養したしたし、オ  
 役目はすんだ、勝手にせよと、首  
 受取り、玄蕃は館へ松王は、駕にゆ  
 られて立歸る。夫婦は門の戸びつし  
 やりしめ、ものをも得云はず、青息

吐息 五色の息を一時に、ほつと吹  
 き出す計りなり、胸なでおろし源藏  
 は、天を拜し、地を拜し、詞ハア、有  
 難や添けなや、凡人ならぬ我君の、  
 御聖徳が顯はれて、松王めの眼がか  
 すみ、若君と見定めて歸つたは、天  
 成不思議のなす所、御壽命は萬萬年  
 悦べ女房詞イヤもう、もう大低の事  
 ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉  
 へ、菅相亟様はいつてござつた  
 か、但し首が黄金佛ではなかつたか  
 似たと云ふても五と金、實の華の御  
 運開きと餘り嬉しうて涙がこぼれる  
 ハア、有難や尊やと、悦びいさむ折  
 からに、小太郎が母いきせきと、迎  
 ひと見えて門の戸叩き、詞寺入の子の  
 母でござんす、今漸歸りましたと  
 云ふ聲聞くより又恠り、一つ遁れて

また一つ、こりやマア何と、どうせ  
 うと、妻が騒げど夫は胴すゑ、詞コリ  
 ヤ最前云ふたは爰の事若君にはかへ  
 られぬ、狼狽者めと戸浪を引退け、  
 門の戸ぐわらり引明れば、女は會釋  
 し、詞コレはまア／＼御師匠様で御座  
 りますか、わるさをお頼み申します  
 どどこに居やるぞお邪魔であるにと、  
 云ふを幸ひ、詞イヤ奥に子供と遊んで  
 みます、連立つて歸られよ、と眞顔  
 で云へば、詞オそんなら連れて歸りま  
 しよと、ずつと通るを後より、只一  
 討ち切付くる、女もしれ者ひつばづ  
 し、逃げてでも逃さぬ源藏が、刃する  
 どく切付くるを、我子の文庫ではつ  
 しとうけ止め、詞コレ待つた待たんせ  
 コリヤどちうやと、刃る刃も用捨な  
 く、又切付くる文庫は二つ、中より

ばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の旗、あらはれ出しはコハイかにと、不思議の思ひに劔もなまり、すゝみかねてぞ見えにける、小太郎が母涙ながら詞若君普秀才のお身がはり、お役に立てゝ下さつたか、まだか様子が聞きたいと、云ふに悔りやシテくそれは得心か。得心なりやこそ此經帷子に六字の旗。ムウシテ其許は何人の御内證と、尋る内に門口より詞梅は飛び櫻はかるゝ世の中に、なにとて松はつれなかるらん、女房悦べ、作はお役に立つたぞと、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す、ヤア未練者めと叱りつけ、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度悔り、夢か現か夫婦かと、呆れて言葉もなかりしが、武部源藏

威儀を正し詞一禮はます跡の事、これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存はいかに、いぶかしきよと尋ぬれば、オ、御不審尤、存知の通り我々兄弟三人は、めい／＼に別れて奉公、情なや此松王は時平公に従ひ親兄弟とも、肉縁切り、御恩語けたる普相巫様へ敵對、主命とは云ひ乍ら皆これ此身の因果、何とぞ主従の縁切らんと作病かまへいとまの願ひ、普秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、よもや貴殿は討ちせせまい、なれども身がはりに立つべき一子なくんばいかゞせん、爰に御恩の報する時と、女房千代と云ひ合せ二人の中の伴をば、先へ廻して此の身替り詞机の敷を改めしも、我子は来たかと心のめど、普相巫に

は我性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない／＼と、世上の口にかゝる悔しき、推量あれ源藏殿、伴がなくなればいつ迄も、人でなしと云はれんに、持つべきものは子なるぞやと、云ふに女房猶せき上げ、草葉のかけで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ詞もつべきものは子なるとは、あの子が爲によい手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追ふたを、叱つた時の其の悲しき、冥途の旅へ寺入と早虫がしらせたか、隣村へ行くと云ふて、道までいんで見たれ共、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるゝものぞ、死顔なりとも今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香奠

四十九日の蒸物まで持つて寺入さすと云ふ、悲しい事が世にあらうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よしと、美しう生れたが、かあいやその身の不仕合せ、何の因果に疱瘡まで、仕舞ふた事ぢやとせき上げて、かつばと伏して泣きければ、俱に悲しむ戸浪は立寄り詞最前にナ、連合の身がはりと思ひ付いた傍へいて、お師匠様今から頼み上げますと、云ふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理と、涙添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女房もなんでほへる、覺悟した御身がはり、内で存分ほへたでないか、御夫婦の手前もある、イヤ何源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最

後の節、未練な死を致したのでござらう。イヤ若君菅秀才の御身替りと云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さしのべ。アノ逃げ隠れもいたさずに。につこりと笑ふて。ム、ハ、ハ、ハ、ハ、出かし居りました、利口な奴、利發な奴、けな氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立し、嘸や、草葉のかけよりも、うらやましかる、けなりかる、伴が事を思ふに付け、思ひ出さるゝ〜と、流石同腹同性を、忘れかねたる悲歎の涙詞のう其の伯父御に小太郎が、逢ひますわいのと取付て、わつと計に泣き沈む、歎きももれて菅秀才一間の内より立出で給ひ、我に代る

としるならば、此悲しみはさせまいに、可愛の者やと御袖を、しぼり給へば夫婦ははつと、俱にひたすら有難涙、次手乍らに若君様に御みやげと、松王つゝ立ち詞申付けた用意の乗物、早く〜と呼はるにぞ、ハツと答へて家來共、お目通りにかきすゆる、イヤ御出でと戸を開けば、普相丞の御臺所、ノウ母様か我子かと、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打ち詞方々と御行衛尋ねしに、いづくにか御座なされし。サレバ、北嵯峨の御隠れ家、時平の家來が聞き出し召捕りにむかふと聞きそれがし山伏の姿となり、危い所奪ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供なされ、姫君にも御對面、コリヤ〜女房詞小太郎が死骸あの乗物へうつ

し入れ、野邊の送りいとなまん。ア  
いと返事の其中に、戸浪が心得抱い  
てくる、死骸を網代の乗物へ、乗せ

あさきゆめみし心地して、後は門火  
にゑひもせず、京は故郷と立別れ、  
鳥野邊さして連歸る。

て夫婦が上着をとれば、あはれや内  
より覺悟の用意 下に白無垢麻上下  
心を察して源藏夫婦 詞野邊の送りに  
親の身で子を送る法はなし、我々夫  
婦が代らんと、立寄れば松王丸詞イ  
ヤ／＼これは我子にあらず、菅秀才  
の亡体をお供申す、いづれもは、門  
火門火と門火をたのみ頼まるゝ、御  
臺若君諸共に、しやくり上たる御涙  
冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋  
迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、  
賽の河原で砂手本、いろは書く子を  
あへなくも、ちりぬる命是非もなや  
あすの夜誰か添乳せん、らむうめめ  
見る親心、合劍と死出の山けこえ合



### 三勇士名譽肉彈

(松田種次舞臺裝置)

松居松翁 原作  
鶴屋南北 脚色  
鶴澤友次郎 作曲

### 三勇士名譽肉彈

(床本) 三勇士名譽肉彈

下元旅團長	竹本津太夫
松下中隊長	竹本文字太夫
北川一等兵	豊竹呂太夫
作江一等兵	豊竹つばめ太夫
江下一等兵	竹本小春太夫
小隊長	竹本津の子太夫
馬田軍曹	豊竹辰太夫
内田伍長	竹本播路太夫
便衣隊	竹本源路太夫
鶴澤友三郎	鶴澤芳之助
豊澤猿糸	鶴澤重造

「爆彈三勇士」の功績は演劇、映畫歌曲其他あらゆる方面につく歌されてゐますが爰に日本が世界に誇る唯一の郷土藝術文樂座人形淨瑠璃に是非上演し不朽の名譽を胎し傳へんため永い傳統を持つ人形淨瑠璃道に新境地を拓いて劃期的なるこの上演を見た次第であります。昭和七年二月二十二日上海に於ける皇軍か戦略上敵陣地廟行鎮を是非占據せねばならぬ。突撃路開拓の決死隊に撰ばれた中の作江、江下、北川の三勇士は祖國のため自ら身に爆藥の破壊

筒をつけて世界空前の壯烈な戦死をした大和魂の奮ひ立つ一曲であります。

志士は溝壑にあるを忘れず勇士は其元を喪ふを忘れずとかや、時しも昭和七年、月は如月下二日、御國に忠を築業路の響も高き三勇士、語り傳ふる數島の大和の國の櫻花、幾千代かけてにほふらん、爰は所も上海に近き村落麥家宅、霜さへ水る曉に間近く敵を沖の石かはく間もなき汗や血に、まみれてつくす工兵の其塹壕に前進の命を松下中隊長折しもあれや舊曆の十七日の月冴えて怪し人のうごめく影、誰かくハイ私は廟行鎮鐵條網ある咄し澤山くする事有中隊長殿怪しい奴をとらへまし

人形

松下中隊長 吉田玉幸  
 便衣隊 桐竹紋太郎  
 馬田軍曹 吉田玉市  
 大島少尉 吉田光之助  
 東島少尉 吉田玉徳  
 島田一等兵 吉田多三郎  
 古川一等兵 吉田兵次  
 高野一等兵 吉田榮三郎  
 黒澤一等兵 吉田文二郎  
 村田一等兵 吉田玉昇  
 村上一等兵 吉田榮之助  
 北川一等兵 桐竹紋十郎  
 作江一等兵 吉田扇太郎  
 江下一等兵 吉田文五郎  
 内田伍長 吉田文作  
 下元旅團長 桐竹門造  
 兵士 大勢

た、ム、よし連て来い、ハイ、オイ、  
 言事があるならそこで言へ、それ願行  
 鎮中々堅い、機關銃澤山ある日本兵  
 少ない中々落る事ないナ、外へ廻る  
 ヨロシイナ、黙れ貴さまは誰に頼ま  
 れてそんな馬鹿な宣傳をしに廻りよ  
 るか、怪しい奴だ、馬田軍曹繩れ、  
 ハ、ア中隊長殿危ない事でしたナ、  
 あぶない事だつた、オイ、馬田軍曹  
 そやつ何か持てゐないか身体検査を  
 して見よ、ハア中隊長殿軍隊手帳が  
 ありました、ムそふか、第十九路軍  
 の正規兵です、ム、扱はそうかと顔  
 見合せ、油断ならじと囁やく折しも  
 軍用電話、けたましく内田伍長は  
 取上てハ、ハ、ハ、松下中隊で有ま  
 す、旅團命令で有ますか、ハ、ハ、  
 、復哨、本隊は其主力を持って二

十二日午前五時三十分を期し願行鎮  
 の總攻撃を開始す、松下中隊は其正  
 面の鐵條網を爆破し、五個所に歩兵  
 突撃路を開くべし、終り、ハ、ハ、  
 ハ、分りました、中隊長殿命令が參  
 りました、ム、中隊長殿電話に出て  
 下さい、よし、ハ、松下大尉であり  
 ます、ハハ分りました、本中隊は直  
 ちに決死隊を募り確かに其時間まで  
 に敵の鐵條網を破壊し完全に突撃路  
 を開きます、終り、と答ふる聲も覺  
 悟の一諾、馬田軍曹進み寄り、中隊  
 長殿旅團の御命令でもあの敵の鐵條  
 網は實に構築堅固で我爆撃機が日夜  
 必死の奮闘も未だ何等の効果も無く  
 尋常一様の手段では迎も駄目だと思  
 ひます、とつぶさに語る敵情に、松  
 下大尉につこと笑ひ、其出来ない事

を仕遂るが日本軍人の誇りである、  
 日本軍人の上には常に天佑有て守る、  
 是日の本の常ぞかし、小隊長集  
 れ、只今の旅團命令に依て當中隊は  
 決死隊を募る、大島小隊長は三名宛  
 二組の先發班、後續班の決死隊を選  
 ばせよ、東島小隊長は豫備班として  
 三名の決死隊を選ばせよ、終り、復  
 哨、大島小隊長は、三名宛、二組の先  
 發班後續班の決死隊を選ばせよ、終  
 り、復哨。東島小隊長は三名の豫備  
 班を選ばせよ、終り、よし、小隊  
 長は選抜兵を集めてくれ、ハイ第一  
 小隊島田一等兵古川一等兵高野一等  
 兵、黒澤一等兵村田一等兵村上上等  
 兵集れ、第二小隊北川一等兵、江下  
 一等兵作江一等兵集れ、聲に應じて  
 ばらんと居並ぶ諸士の勇しや、氣

を付、番號、一、二、三、四、五、  
 六、七、八、九、集合終りました、  
 よし、扱て九名者に中隊長は一言す  
 只今旅團命令が降た、本中隊は正面  
 の鐵條網を破壊し五條の突撃路を開  
 くべき重大なる任務を受た、是本中  
 隊の無上の光榮である、しかし此作  
 業は尤困難である、されば今日迄  
 多くの兵士は倒れ、様ざまの犠牲を  
 拂つたが中々堅固の要害である、本  
 隊は誓て此名譽ある任務を完うし、  
 目的を成就しなければならぬ、そ  
 こで爰に決死隊を募る、依て此決死  
 隊に選抜せられたお前達は一命を賭  
 して此任務を全ふしてくれい、ハイ  
 我々は決死の覺悟をもちまして、事  
 に當ります、ヲ、よく言つてくれた  
 嬉しいぞツ、諸君が國家の爲に盡さ

んとする赤誠の精神に對し、松下大  
 尉愈々感激にたへない畏れ多いこと  
 ではあるが、大元帥陛下に置かせら  
 れては此忠誠を聞き召さば嘸や至情  
 の發路ぞと御嘉納あらせらるゝ事  
 あらぶ、皆わかたつたか、ハイ、わか  
 りましたと意氣冲天の勇士の言葉、  
 ヲ、勇ましい天晴だ、と口には言へ  
 ど心には御國の爲とは言ながらあた  
 ら勇士を戦場の土と化するか、哀や  
 と怯む心を取直し、氣を付け、只今  
 より、擧手の禮を以て秋別にかへる  
 敬禮、互に擧手の一禮はこれぞ此世  
 の名残りぞと別れてこそは進み行く  
 時の至るを三人が月の光りをあびな  
 がら、語るも清き、戦友の胸の内こ  
 そ由々しけれ、作江伊之助こなたを

見やり、ア、月はますく、冴えてゐるナア、オイ北川なをぼんやり考へてゐるのだ、何か國の事でも思出したのか、ナニそうじやないよ、おれはひそかに謀事をめぐらしてゐるとでもいふのかな、兎に角考へてゐるんだ、ナニ謀事ハ、い、考へもくそもあるものか、此場合手段はたつた一つしかないのだ、貴様の手段てのは大抵見當がついてるよ、負ず嫌いの貴様の事だから、鐵條網へ喰ひつかふとでも言ふんぢやろ、狼じやなか、よせやい、アハ、互ひに通ずる心と心、オイ江下ゐるかと言ひつゝ來る内田伍長ハツ江下居ります、お前國から、郵便が來てゐるぞ、お前ばかりうまくしてゐるナア、貴様も昨日來てたじやないか、そふ

だつたナア、併しお前達選抜にあつてよかつたな、中隊長殿の御訓示もあつたが皆しつかりやつてくれよ、中隊長殿の處へもふ一度來るだらう、其時又逢はふ、待つてゐるぞ、と言捨てこそ急ぎ行く、江下手紙取上れば、オイ江下どこから來たんだお父さんからか、イヤ家からじやないよ、何處かの子供からだ、では慰問の手紙か、ア、コレハ此間日本を立つ時久留米の停車場で逢つた少年からの手紙だ、フム、ではお前に天子様の爲に働いて下さいといふ、激勵の言葉を興へてくれたと言つて、スツカリ昂奮して居たアノ小學生からの手紙なのか、おれはアノ少年の一言の爲にいつでも死ぬる氣になつて、愉快に日本を出て來る事が出來たんだ、

モウすぐ死ぬるかもわからないが、こふして呑氣にしてみられるのは、矢張りアノ少年の力なんだ、マア見てくれよ、こんな事が書いてあるよ、私の大事な兵隊さん、あなたは立派な手柄をして、久留米へ歸て來る日を私は毎日指を折てまつて居りますよ、あなたの凱旋の時には家中お父さんもお母さんも兄さんも妹もみんなで迎へに行きます、私の大事なもの兵隊さん、本當に天子様の爲めに働いて死なないで歸て來て下さい、ア、可愛い事をかくもんだナア、他人でさへこんなだもの、北川、江下に貰ひ泣きはいゝが江下が死んだらお前も死ぬか、江下が死ななかつたどうせ死ぬんじやないかにウム、そらだ、アノ鐵條網と來たら今まで誰

も手がつけれなかつたんだから一寸でも傍へよればソクボウ砲や爆撃砲であびせかけられるんだから、どうせのがれつこはないんだ、そふだ、破壊筒をかつぎ込んだところで口火をつける前にみんなやられて仕舞んだからな、今度こそは此我々の最後の働きが日本軍隊の運命に關するんだから、しつかりやらなくつちやいけんぞつ、ム、さつきお前が言つた謀事と言つたのは其手段を考へてゐたのか、俺も先刻から決心してゐるんだ、決心ならおれだつてしてゐるだそれなら三人共同じ事を考へてるんだな、そふだ、じや破壊筒を自分の體へくもりつけて體と一緒に爆破させる考へなんだナム此方法が一番上策なんだ、からナ、上策の

下策のといつてコレが日本軍隊に取つた一つの名策なんだ、自分自身が爆裂弾と一緒に敵の鐵條網へ飛込まふといふんだ、是程慥な爆發の方法はないからナ、やろか、やらふしつかりやらふぜ、日本帝國の爲だ作江、江下、北川、サコレドお互の一生の別れだ、水盃といふ處だはどうせ火に燒かれて死ぬ體だ、一つ煙草の吞廻しといふのはどふだらうナ、成程、といつは面白いデハ作江お前から呑み初めるよ、じやおれから呑むとしよふよし來た、煙りはうすき紫の其あかうばふ鬻れの火互ひに目と目心と心併しこうして死を決して見ると存外氣が樂になるんだナ、おれア是から芝居でも見に行く様なほごらかな氣がしてゐるん

だよ、おれだつてそふだこうなるよ何だか呑氣になれたよ、併しうまく鐵條網に近付けければいゝが、そこが天祐だ、此三人の意氣で彼奴等をめくらにして見せらアオイソーラ見ろ雲が出て來たぜ、月が隠れてくれりやいゝがナア、フムアノ雲の具合じや、大丈夫だ、ハ、ア、いゝ月だナア、十七日の月だ、アレを見ると思ひ出さずにやゐられねエナ、國のお母さんに別れた晩の事が、作江アノ晩の貴様の話を聞た時、おれは貰ひ泣をしたよ、お前のお父さんは日露戰爭のとき輜重輸卒だつたので、勳章一つ貰はずに歸つて來たといつてお母さんは一緒になつて口惜しがつてゐたそうだな、今度こそは此事を聞たらお前のお母さんも泣いて嬉しが

るだらう、ム、子供の時から始終言はれてゐたんだ、立派な軍人になつて國家の爲に働いてくれつて、其時が今恰度やつて來たんだ、おれはそれを思ふと北川、江下、俺も嬉しいよ、しつかりしろよサモウ時間も追つて來たから、そろ／＼仕度をしなればなるまい、フム中隊長殿に此計畫を報告して行かなければいけないだらふ、サアアノ人情深い中隊長殿の事だがら、いくら決死隊とは言へ、始めから死でかゝる様な無茶な事は許さないかも知れないぞ、それもそうだ、謀事は密なるを何とか言ふ事があるだらふ、仲間にも黙つて別れた方が一層サバ／＼してよかばい、成程それもそふだな、男らしくて、其方がいゝや、サア是で此世に

思ひ残す事はない、ではボツ／＼出掛けよふぜ、折しもきこゆる機關銃三士は耳を傾けて、ヲ、先發班が出發したぞ、爆發せんじやないか、不發らしいぞ、オウ後續班も出發したぞ、やられたらしいな、フム味方は随かに仕損じたぞ、あきれて暫し言葉なし、馬田軍曹かけ來り、オイ残念だ先發班後續班も全滅したぞ、残るはお前達ばかりだ右翼は危機に瀕してゐる、大日本帝國の爲だ頼むぞ／＼言捨てゝこそ急ぎ行く、サ愈々やるのだ、見る月が隠れたぞ、天祐だべたぞ有難い／＼／＼三人目と目を見合はせて、心の覺悟御國の爲、身は肉彈の三勇士流石は櫻大和の誇り其花またぬ勇士と勇士互ひに抱き月影も雲にかくれて打出す砲彈

の響き轟きて廟行鎮の要害は蜘蛛手と張りし鐵條網近づく事もならぬの此手かの手も盡果てゝ策をほどくすすべもなし、折しも忍ぶ三人の影破壊筒をひんだかへ亂射亂撃ものかはと、探照燈の光りをさげ、鐵條網にせまり行く、天祐だぞ、オイ、點火だ／＼よし來た、天皇陛下萬歲大日本帝國萬歲／＼の聲もろとも、天地もゆるがす大爆音、さしもほこりし堅壘も破れて爰に突撃路。夜は明はなれ東天に輝き昇る日の御旗下元少將しづ／＼と隊伍と／＼のへ立出る、氣を付けて、松下大尉の報告を委しく聞いて旅團長あまた／＼び打うなづき扱は北川江下作江の三勇士の爲に堅固の鐵條網も破壊され突撃路は開かれ容易に我軍の勝利にな

つたるも、皆是三勇士の賜物じゃ、  
爰に下元旅團長以下戦友一同謹んで  
三士の英靈に氣を付け捧げ銃、

(これより軍歌合唱)

肉弾ここに奏功の誓れを世々に傳ふ  
らん。

昭和十年七月廿二日印刷  
昭和十年七月廿三日發行  
大阪・四ツ橋文樂座  
發行人 大塚 眞三

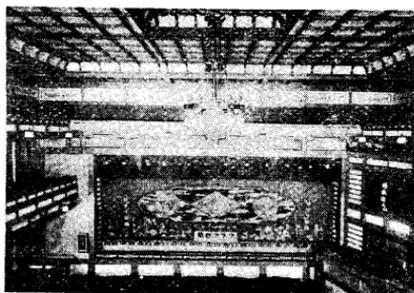
編輯 成山 桂三

大坂市西區土佐堀通一丁目  
印刷者 永井太三郎

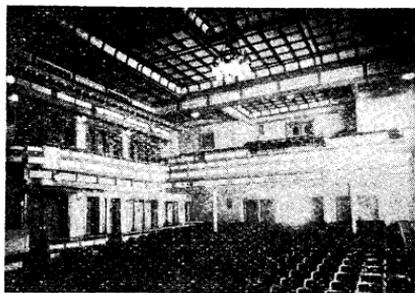
大坂市西區土佐堀通一丁目  
印刷所 永井日英堂印刷所



大阪文樂座全景



大阪文樂座舞臺



大阪文樂座客席

秀麗「富士」にも

まさる

美麗な印刷



あやゆ印刷

永井日英堂印刷所

大阪東區南本町二  
電話船場四九〇

大阪西區土佐堀一  
電話土佐堀4941, 4939, 3083